28

『東医宝鑑』の研究——鍼灸篇について

吉田和裕

一、はじめに

『東医宝鑑』は朝鮮を代表する十六世紀の医学書のひとつである。宣祖三十年（一五九七）に李氏朝鮮十四代宣祖の命を受けて、大医許浚（一五四六～一六一五）が臨海君二年（一六一〇）二十五巻を輯成し、三年後の臨海君五年（一六一三）に刊行される。

本文の概要は、二十五編二十五巻から成り五編に大別され、鍼灸篇は第二十五篇一巻に記述されている。

二、研究の背景と目的

『東医宝鑑』は、李朝時代の国家大事業として編集発行され自国はもとより近隣する中国、日本にも大きな影響を与え高い評価を受けている。現在も朝鮮半島で研究が推し進められ臨床に活かされ重用されている。書誌学的に見ても各国でしばしば再版されるなど朝鮮医書として誇りうるもので、東アジアの医史学を研究する上で必要不可欠である。

本研究の目的は、朝鮮半島に独自の鍼灸学が樹立したのが近世李朝時代であると考え、この時代に編成された東医学の祖である『東医宝鑑』鍼灸篇について検討する。

三、方　法

①鍼灸篇を項目別に整理

②引用された医学書の分析

③李朝時代の鍼灸医学の状況

四、結　果

①鍼灸篇は、一巻しか存在せず他の篇に比べると分量的に少ないが、的確に体系付けて治療法則、治療法、経絡、腧穴、禁忌、吉凶、忌日等が述べられている。

②引用文献は、明代以前の中国医書学がほとんどであるが、一部朝鮮医書が用いられ他に不明な医書もある。唐以前の医書は「内経」「霊枢」「難経」「甲乙経」「千金方」、宋の医書は「銅人経」「証類本草」「資生経」「外科精要」「和剤局方」、金元の医書は「世医得効方」「外科

精義」、明の医書は「丹溪心法」「東垣十書」「医学綱目」「医学入門」「万病回春」「古今医鑑」「神応経」、李朝の医書は「医方類聚」、不明医書は「俗方」「鍼灸書」等である。その中でも「銅人経」からの引用が一番多く、引用頻度は次いで「医学入門」「霊枢」「資生経」「医学綱目」等の順である。

③許浚は、宣祖に奉勅され十六年間の長い年月をかけて『東医宝鑑』を撰し鍼灸を取り込んだのは、李朝時代に鍼灸方術がかなり重要視されていた事を意味する。すなわち、李朝時代に中国医学が朝鮮の医学に更に影響を及ぼし新たに鍼灸医学を固持できたと考えられる。

五、まとめ

鍼灸篇は、第二十五篇に収められ最後の篇一巻にある。鍼灸医学の方法論を詳細に網羅記述し、明確に系統付けられ編纂がなされたものと謂える。

（順天堂大学大学院医学部医史学研究室）